

除外のストラテジー

——太宰治『お伽草紙』論への一視角——

高田知波

太宰治の『お伽草紙』が、太平洋戦争下の最末期に書かれ敗戦直後に出版されたことは、周知の通りである。つまりこの作品は「二つの占領」⁽¹⁾の両期にまたがるかたちで成立したわけであり、例えば初版テキスト（筑摩書房、一九四五・一〇）には「瘤取り」の中に「××××鬼」「××××鬼」という伏せ字処置が施されていたのが、翌年二月に出た再版テキストではそれぞれ「殺人鬼」「吸血鬼」として起こされる一方で、初版本「カチカチ山」の中の「アメリカ映画」「アメリカ」という表現が再版本ではともに「ジャズ映画」に改められてるといったディテールの異同の中に、われわれは「二つの占領」の傷痕を見出すことができるが、原稿執筆は敗戦前に完了していたという近親者の証言があり、この作品が軍部に占領された大日本帝国の言論統制、事前検閲という制度との緊張関係の中で書かれていたことは間違いないだろう。そのことを前提にした時、『お伽草紙』を論じるためには「何が書かれているか」という視角とともに、「何が書かれていないか」という視角からのアプローチが不可欠であると私は考えており、後者に焦点を合わせた時に何が

見えてくるかを検証してみようというのが、本稿の趣旨である。

1

「何が書かれていないか」という視角から『お伽草紙』を眺めた時、真っ先に浮かび上がってくるのは、すでに多くの言及のある「桃太郎」の除外である。作中、「桃太郎」に関する叙述は二箇所ある。一つは「前書き」部分（初版テキストには「前書き」というタイトル表示がない）の中の、防空壕の中で父が幼い娘をなだめる手段として読んで聞かせている絵本の具体例として「桃太郎、カチカチ山、舌切雀、浦島さんなど」と並べられたリストの筆頭の「桃太郎」の挙名であり、もう一つが、最終編にあたる「舌切雀」の冒頭部である。この中で語り手の「私」は当初、「瘤取り、浦島さん、カチカチ山、その次に桃太郎と、舌切雀を書いて、一応この『お伽草紙』を完結させようと私は思つてゐ」たのだが、結局、「その計画を放棄した」ことを「告白」し、「日本一の桃太郎を描写する事

は避け、また、他の諸人物の決して日本一ではない所以をくどくどと述べ」ている。だが、これをもって現実の作家・太宰治の制作過程の途中に計画の挫折ないし変更があったと受け取るのは軽率にすぎらう。なぜなら、「カチカチ山」の次に「桃太郎」を書く計画があったというのはまったくの楽屋裏の事情に過ぎないし、また「前書き」で娘に読んで聞かせる絵本のリストの中に「桃太郎」を挙げてしまったから、それとの整合性を言い訳する必要があったという線も消える。この作品が書き下ろし形式で活字化されている以上、もしも太宰に執筆途中で桃太郎構想の放棄という事態が本当に生じたのだとすれば、未定稿の「前書き」部分から「桃太郎」の三文字を削除するだけで処理が済んでしまはずだからである。したがって現実の作家のレベルにおいて「桃太郎」の除外が当初から予定されたものであったことはもちろん、作品世界の全言説と構造を統括する〈作者〉のレベルにおいても（本稿においては「作者」という用語はすべてこの意味で統一し、生身の「作家」と区別してある）、『お伽草紙』という本を「私」が「書いてゐる」という設定の明示によって、語り手による「桃太郎」計画の「放棄」の陳述が見せかけの「告白」に過ぎず、「前書き」との不整合性をむしろ際立たせるための仕掛けであった可能性を強く示唆している。「桃太郎」を除外することによって『お伽草紙』の世界が成立していることを、いわば「見せけち」のかたちで読者に強く印象づけるといふストラテジーを、「舌切雀」冒頭部に挿入された「くどくど」としたコメントの奥に読み取ること。これが本稿の出発点である。

「端的にいえば、太宰の小説が弱者の口説の文学だったからで、

『桃太郎』を書かなかったことに太宰の軍国主義批判、時勢への抵抗を読み取るなど言語道断だ⁽²⁾』という大久保典夫氏の見解もあるが、「当時、桃太郎が戦意高揚の具に利用されていたことを思えば、ここに太宰の時勢に対するひそかな抵抗を読みとることも不可能ではない。少なくとも時代の悪気流との緊張関係なしにはこの作品は成立しなかつた⁽³⁾』という東郷克美氏らの指摘は、もっと積極的に評価されるべきであり、「桃太郎」の除外がことさらに際立たされていることは、太平洋戦争末期という時代のコンテクストの中において確かに重要な意味を持っていたはずである。「前書き」の絵本のリストの一番目に挙げられている「桃太郎」は、近代国家の成立とともに、近世以来の「五大お伽」の中でも一頭地を抜いた存在となり、童話としても小学校の国語教材としても、つねに子供向けお伽の首座を占め続けてきた⁽⁴⁾。そして滑川道夫氏や鳥越信氏⁽⁵⁾の研究によると、太平洋戦争期に入ると例えば、一九四三年に「大東亜戦争第二周年 十二月八日」の戦意高揚ポスター（中部陸軍報道部作成）に「征け桃太郎、米英を撃て」という大文字が踊り、戦争末期には長編アニメーション『桃太郎の海鷲』が制作され、あるいは「日本ちゆうに桃太郎が産まれる。／つよい 桜色の桃太郎が産まれる。／日本ちゆうの桃太郎が出陣する。／一人残らず出陣する。／工場に向かつて出陣する。／学校に向かつて出陣する。／戦場に向かつて出陣する。／海と、空へ出陣する」といった調子の百田宗治の「少国民詩」「桃太郎の出陣」（『少国民文化』一九四四・一）が発表されるなど、「軍国主義桃太郎は大手をふった。教科書ばかりでなく映像、ラジオ劇に登場するにいたる。戦闘機に乗った桃太郎の

勇姿がポスターになり、「桃太郎像が『鬼畜米英打倒』のため帝國主義侵略軍を象徴する」状況が現出していたということであるが、そのような時期に書かれた『お伽草紙』が「桃太郎」の除外を明確に宣言していたのである。

2

したがって「前書き」における絵本の題名のリストの第一番目に「桃太郎」が挙げられ、「舌切雀」の冒頭部で「桃太郎」執筆計画の「放棄」にいたった経緯が長々と語られているという対応の中に、「桃太郎」除外を際立たせるための作者の戦略的意図がこめられているのだと私は考えているのだが、「前書き」の表現自体の中に「桃太郎」除外に向かうベクトルがすでに暗示的に埋め込まれていたことも見落とせない。「前書き」は空間的には「防空壕の中」に限定されているが、その後半部は次のとおりであり、

母の苦情が一段落すると、こんどは、五歳の女の子が、もう壕から出ませう、と主張しはじめる。これをなだめる唯一の手段は絵本だ。桃太郎、カチカチ山、舌切雀、瘤取り、浦島さんなど、父は子供に読んで聞かせる。

この父は服装もまづしく、容貌も愚なるに似てゐるが、しかし、元来ただものではないのである。物語を創作するいふまことに奇異なる術を体得している男なのだ。

ムカシ ムカシノオ話ヨ

などと、問の抜けたやうな妙な声で絵本を読んでやりながら

も、その胸中には、またおのづから別個の物語が醗酵せられてゐるのである。

そしてそのすぐあとに「ムカシ ムカシノオ話ヨ」以下三行の絵本からの引用で始まる「瘤取り」が続くという構成になっている。「前書き」の「防空壕の中」という空間設定に、戦時中という時代のメタファーを見てとることは容易であるが、いま注目したのは、その防空壕の中で娘に絵本を読んで聞かせている「父」から、「別個の物語」の〈作者〉が生成される契機となったのが「桃太郎」ではなく「瘤取り」だったという設定を読み取ることができるといふ点である。言うまでもなく「桃太郎」と「瘤取り」とは△鬼▽の登場という設定では共通しているが、にもかかわらず「桃太郎」を読んでやっていた時には、この「父」の「物語を創作する」といふまことに奇異なる術は発動を喚起されず、「瘤取り」にいたって初めて絵本をもとにした「別個の物語」の創作意欲が「醗酵せられ」たというふうに読めるこの叙述と構成は、まさしく「桃太郎」除外意図の方向性を示しているはずだからである。

ここでもう一度「舌切雀」冒頭部のコメントに戻ると、この中で「私」は「桃太郎」構想「放棄」の理由として二点あげているが、その第一は、桃太郎を書くためには「鬼ヶ島の鬼」を「征伐せずには置けぬ醜怪極悪の人間として、描写することが必要だが、ギリシャ神話等と比べると「日本の化物は、単純で、さうして愛嬌があ」り、「絵本の鬼ヶ島の鬼たちも、図体ばかり大きくて、猿に鼻など引掻かれ、あつ！と言つてひつくりかへつて降参したりしてゐる」て「善良な性格のものやうにさへ思はれる」といふ点であ

る。この説明の背後に「鬼畜米英」を透視することは容易であり、したがって「日本」の「鬼」を「醜怪極悪の人間」として描けないから「桃太郎」の創作を放棄したという「釈明」には、「鬼畜」と呼ばれている「米英」人たちを「醜怪極悪な人間」として描くことは自分にはできないというメッセージがこめられていたと見ることができるはずであるが、「桃太郎」の「鬼」を除外した『お伽草紙』の作者が、それに代わる物語として選んだ「瘤取り」の方は、童話や説話のいずれにおいても「退治」や「征伐」の対象にはなり得ないタイプの鬼の話として一貫している点に私は注目したい。「瘤取り」話の最も古いエクリチュールは『宇治拾遺物語』巻一ノ三の「鬼に瘤取らるる事」だとされているが、この『宇治拾遺』における鬼も「純粹な心の和楽だけを目的とした宴をもっていること」と、「右頬に瘤ある翁に何の危害を加えることも思いついていないこと」の二点において「ずばぬけて特色的」な存在であることが指摘されている異色の鬼であった。つまり「瘤取り」はもともと「醜怪極悪」な存在として描き出す必要のない「鬼」の物語だったのであり、この選択の中にも『お伽草紙』から「桃太郎」を除外して「瘤取り」を劈頭に据えた作者の意図の戦略性を看取することができるし、さらに「瘤取り」の鬼に関する叙述の一節に、初版本テキストでは「鬼にも、いろいろの種類があるらしい。×××鬼、×××鬼、など憎むべきものを鬼と呼ぶところから見ても、これとはにかく醜悪の性格を有する生き物らしいと思つてゐると」という伏せ字処理が行われていたことや、この伏せ字が再版本においてそれぞれ「殺人鬼」「吸血鬼」として起こされたことは本稿冒頭でも触

れておいたが、初版本の伏せ字の文字数と再版本の文字数とが一致しない。そこで原稿執筆時の「鬼畜米英」という時代状況とを照応させてみた時、むしろ伏せ字によって「匿された言葉」としての「アメリカ」および「イギリス」への想像に読者を誘う仕掛けが、極限的な言論統制を逆利用するかたちで意図的に施されていたと考えることができるのではないだろうか。（初版が出たのは敗戦直後であり、この伏せ字処置が編集者・出版社サイドの判断によるものであった可能性は少ないだろう。）また一般に絵本の「瘤取り」では赤鬼と青鬼をはじめカラフルな（少なくとも二色の）鬼の図像が定型になっていたはずであるが、「絵本」をもとにしたという設定の『お伽草紙』の「瘤取り」では、登場する鬼の群像の肌の色の設定から「赤」以外の色彩がすべて除外され、

見よ。林の奥の、やや広い草原に、異形の物が十数人、と言ふのか、十数匹と言ふのか、とにかく、まぎれもない虎の皮のふんどしをした、あの、赤い巨大な生き物が、円陣を作つて坐り、月下の宴のさいちゆうである。（傍点引用者。傍点は以下すべて同じ。）

とにかく、いま月下の宴に打興じてゐるこの一群の赤く巨大な生き物は、鬼と呼ぶよりは、隠者または仙人と呼称するほうが妥当なやうなしろものなのである。

お爺さんだつて、知つてゐる。眼前の、その、人とも動物ともつかぬ赤い巨大な生き物が、鬼といふおそろしい種族のもので

あるといふ事は、直覚してゐる。

というかたちで「赤」と「巨大」との結合イメージで一貫させられている。この「赤く巨大な」集団というリフレインから読者が「米英」人の肉体を連想することは当然作者の計算の中に入っていたはずであり、そのあとに「鬼」と言つても、この眼前の鬼どもは、××××鬼、××××鬼などの如く、佞悪の性質を有してゐるものでは無く、顔こそ赤くおそろしげではあるが、ひどく陽気で無邪気な鬼のやうだ」という再度四文字ずつの伏せ字表現が使用されているのである。「瘤取り」におけるこのレトリックと、「舌切雀」冒頭部における「桃太郎」除外を強調するコメントとを繋ぎあわせてみたとき、そこには作者のしたたかなストラテジーが浮かび上がってくるはずである。

3

△鬼▽の出てくる話群の中から「桃太郎」が除外されて「瘤取り」が採られているという選択が、△鬼退治▽系の物語を書かないという意図を浮き立たせるストラテジーであったことに注目しつつ、さらに「何が書かれていないか」という視角から『お伽草紙』の編成を見直した時、△仇討ち▽系の話が一切取り入れられていないことに気がつく。「桃太郎」に次いで、『お伽草紙』で「五大お伽」から除外されていることが目立つのは「猿蟹合戦」である。除外された「桃太郎」と「猿蟹合戦」との共通項としていずれも芥川龍之介によるパロディ小説がすでに書かれていたという事実注目して、

「太宰が同じ題材を小説化すれば、読者によって当然両者の比較されるのが予想されるので、あえて太宰はそれを避けたのではないか」と推定した相馬正一氏の見解は、その後の『お伽草紙』研究に一定の影響を与えてきているが、このラインでは、幸田露伴・森鷗外・坪内逍遙といった明治の文豪たちによって相次いで作品化された歴史を持つ「浦島太郎」が『お伽草紙』に採られている理由を説明できない。『お伽草紙』の「瘤取り」の冒頭部には、「浦島さん」について、「まず日本書紀にその事実がちやんと記載されてゐるし、また万葉にも浦島を詠んだ長歌があり、そのほか丹後風土記やら本朝神仙伝などといふものに依つても、それらしいものが伝へられてゐるやうだし、また、つい最近に於いては鷗外の戯曲があるし、逍遙などもこの物語を舞曲にした事は無かつたかしら」という叙述があり、先輩作家による「浦島」作品があること承知の上で「浦島さん」の物語が書かれていたことが明示されているのである。私は、前節で見てきた「舌切雀」冒頭部の「桃太郎」除外についての語り手のコメントが、そのまま「猿蟹合戦」除外の論理を内包しているのだと考へている。△鬼退治▽の話を書くためには鬼を「醜怪極悪の人間」に描かねばならないがそれが自分にはできないというロジックは、△仇討ち▽の話を書くためには復讐されて当然と思われただけの悪人として仇を描かねばならないがそれが自分にはできないという論理に容易に転化できる。したがって鬼退治譚の代表である「桃太郎」を除外した『お伽草紙』の作者が、「五大お伽」中で仇討譚を代表する「猿蟹合戦」除外するのは当然の筋ということになるはずだからであるが、さらに「瘤取り」を採ることによって

「桃太郎」の除外を際立たせたのと同じストラテジーを、「猿蟹」ではなく「カチカチ山」の方が採用されているという選択に看取することができるのではないかと思うのである。

相馬氏は『猿蟹合戦』の仇討ちの陰湿残忍さを云々するのであれば、『カチカチ山』も同じ報恩譚ではないかということになり、理屈が通らなくなる」として、氏はお伽噺としての「猿蟹合戦」と「カチカチ山」との重大な差異を見落としていると言わねばならない。「カチカチ山」も狸に謀殺されたお婆さんの仇を兎が討つ話として流布しているが、この話における敵役としての狸のキャラクターは、「猿蟹合戦」の猿とは様相を異にしている。「最初は可なり頓馬で爺の手に捕へられたほどの狸が、婆の稲搗きの場面になると、忽ち極度に悪賢い偽善者になつて、うまくと老女を騙して縄を解かせ、相手を殺して変装して、うその狸汁を調理して食はせたのみか、東京などの話し方では、帰りがけに冷酷なる棄てぜりふをして行くのである。(略)それが又最後に兎に出逢ふときは、まるで子供見たやうに好奇心に釣られて、少し可愛そうな位に向ふの言ひなり放題になつて居て殺される」という「一貫せざる性格」の持ち主であり、「誰にもすぐ眼に着く三つの部分、二つの繋ぎ目といふものが此童話にはある」ことを指摘した柳田国男の論文「かちかち山」が単行本『昔話と文学』に収められて刊行されたのは、太宰の『お伽草紙』制作の七年前、⁽¹¹⁾同じく柳田が「かちかち山」は本来別々のものだった三つの話を「継ぎ合せ」てできあがったもので、「智謀に富む兎が愚直なる狸を欺き苦しめるといふ一条は、世界共通の動物説話の、殊によく知られて居る部分で、爰ではたゞ狸

が其さま様にひどい目に遭はされた理由を、爺の名代の仇討ちとした点がちがつて居るのである」と規定した『桃太郎の誕生』は、『お伽草紙』の三年前に改版本が出版されている。つまり兎の狸に対する執拗な加虐の部分はおもとは「智謀に富む兎」と「愚直な狸」の物語として独立していた話であり、したがって流布形においても兎と狸の部分はへ仇討ち」というモチーフなしでも成立し得る独立性を有していることを指摘した見解が、『お伽草紙』以前にすでに民俗学者によって公表されていたのである。⁽¹²⁾現実の太宰が柳田国男を読んでいたかどうかを確定することはできないが、⁽¹³⁾『お伽草紙』の「カチカチ山」冒頭で語り手の「私」が、「現今発行せられてゐるカチカチ山の絵本は、(略)、狸が婆さんに怪我をさせて逃げたなんて工合に、賢明にごまかしてゐるやうである」、「しかし、たつたそれだけの悪戯に対する懲罰としてはどうも、兎の仕打ちは、執拗すぎる」、「狸が婆さんに怪我をさせて逃げた罰として兎からあのやうなかずかずの恥辱と苦痛と、やがてぶていさい極まる溺死とを与えられてゐるのは、いささか不当のやうにも思われる」、「私の家の五歳の娘は(略)『狸さん、可哀想ね』と意外な事を口走つた」と展開していく長いコメントに、柳田の指摘と通底する論理を見出すことは可能であろう。『お伽草紙』が「カチカチ山」から仇討ちのカラーを完全に脱色し、「アルテミス型」の処女である兎が、自分に惚れてくる「愚鈍大食の野暮天」の「醜男」の狸をいたぶり続ける物語に変形することができたのは、素材自体の仇討物語としての非一貫性、異質性に負うところがあったことは確かであり、「猿蟹合戦」ではこういう加工は不可能だったに違いない。やはり柳田に

よると「猿蟹合戦」の方も初めから流布形のようなかたちにとまっていたのではなく、「猿にいちめられた弱い蟹が、多くの友の援助を受けて、相手を撃退したといふ方が古く」、「親が殺されて敵が勝ち、子供が大きくなつてから仇を復へすといふことにしても、尚辛抱して人が聴いて居るやうになつたのは、話術の進歩でもあれば経験の増加でもあつた。或は曾我兄弟の物語などが、斯ういふ長たらしい復仇計画の期間を、普通のことのやうに考へさせることになつたのかも知れぬ⁽¹⁴⁾」ということであり、〈親の仇討ち〉の部分は後からの付け加えだったとしても、復讐譚としての基本話型は動かしやうがないからである。ちなみに『お伽草紙』で除外された「桃太郎」と「猿蟹合戦」は、昭和初年の、軍国主義の台頭に対する抵抗や警戒の空気がまだ存在していた時期に、前者はミリタリズムのゆえに、後者は復讐思想のゆえに小学校の教科書教材としての妥当性をめぐる批判と論議が起こり、一九二九年一月には文部省教科書編修委員会が盲学校教科書からこの二つを削除する方針を決定したことが報じられたという、四〇年代の状況からは信じられないような経歴を共有している⁽¹⁵⁾ということである。

5

『お伽草紙』から除外されているのは〈鬼退治〉系と〈仇討ち〉系の話だけではない。主人公の〈宝物〉獲得で終わる話、そしてそれと密接に結び付いた善悪二分法にもとづく応報譚とも呼ぶべき系統の話（以下、便宜上「善悪応報譚」と略称する）の一切が排除されている。「五大お伽噺」の中から「桃太郎」、「猿蟹合戦」とともに「花咲爺」が除外されているのも、けっしてアトラダムな選択の所産ではないだろう。「花咲爺」はまさにこの二つの型の組合わさった代表的な話だからである。「瘤取り」が〈鬼〉の登場という点において「桃太郎」との共通性と差異を持っており、それゆえに『お伽草紙』が「瘤取り」を必要としたことについてはすでに見ておいたが、「瘤取り」は〈隣の爺〉型の話という点において「花咲爺」との間にも共通性と差異を見出すことができる。流布形における両者の最大の差異は〈宝物〉獲得の有無にある。「花咲爺」では正直爺さんが殿様からたくさんの〈褒美〉をもらうのに対して、「瘤取り」のお爺さんの方は鬼を喜ばしたにもかかわらず何の謝礼も受け取っていない。もちろん頬の瘤を鬼に取ってもらったという設定の中に、邪魔物の消滅という意味での利益の受領を読み取れることは可能だが、しかしそれは愉快な踊りに対する報酬ないしは返礼として贈与されたのではなく、再会を保証するための質||担保として奪い取られたものである。つまり鬼の側に立てば、彼らは自分たちを喜ばせてくれたお爺さんに宝物を贈与したのではなく、お爺

さんの大事な宝物(瘤)を強奪しただけであり、同様に不快感を起こさせた隣のお爺さんに対しても、報復ないし処罰としての瘤を与えたわけではない。この贈与も処罰も一切存在しないという「瘤取り」の異色性は、隣のお爺さんに残酷な所業が見られないこととも呼応しつつ、善悪応報譚としての性格をきわめて希薄なものにしており、善悪応報のプロットを積み重ねて行く「花咲爺」との大きな違いがここにある。だからこそ『お伽草紙』は「花咲爺」を除外して「瘤取り」にこのタイプの話の代理も兼ねさせたのでているのであり、「瘤取り」を第一編に配置した編集意図には奥深いストラテジーを見出すことができる。

太宰バージョンの「瘤取り」において流布形からデフォルメされているポイントは、主人公のお爺さんが頬の瘤を邪魔に思っていないどころか、孫のように可愛がっているという設定に変えられていることである。この操作によって『お伽草紙』の「瘤取り」は、もともと「瘤取り」自体が内蔵していたベクトルを徹底化させ、善悪応報譚としての色彩を物語から完全に消去することに成功した。

『お伽草紙』の「瘤取り」には絵本からの引用という設定のカタカナ文がところどころに挿入されているが、鬼に瘤を取られたお爺さんが翌朝家路に就く箇所に入れた「コブヲ トラレタ オヂイサン/ツマラナサウニ ホホヲナデ」という引用¹⁶については、すでに『宇治拾遺物語』の原話においても、またそれをもとにしたいかなる絵本においても、瘤爺さんは、瘤を邪魔にしてこそおれ、鬼によって瘤を取られたことを、いささかもうらんでいないはずである¹⁶。「だから、絵本の文章までも、太宰の世界に置きかえて

『ツマラナサウニ ホホヲ ナデ』としるしたのは、太宰の意図したすりかえである」という長谷川泉氏の鋭い指摘があるが、この「すりかえ」によって、鬼を喜ばした返礼としてお爺さんが何の贈与も受けていないことを鮮明に浮かび上がらせるところに、作者の意図があったのだと思う。そしてこの話の最後で語り手の「私」による次のようなコメントが置かれていることは周知の通りであるが、

お伽噺に於いては、たいてい、悪い事をした人が悪い報いを受けるといふ結末になるものだが、しかし、このお爺さんは別に悪事を働いたといふわけではない。緊張のあまり、踊りがへんてこな形になったといふだけの事ではないか。それかと言つて、このお爺さんの家庭にも、これと言ふ悪人はあなかつた。また、あの酒飲みのお爺さんも、また、その家族も、または、剣山に住む鬼どもだつて、少しも悪い事はしてゐない。つまり、この物語には所謂「不正」の事件は、一つも無かつたのに、それでも不幸な人が出てしまつたのである。それゆゑ、この瘤取り物語から、日常倫理の教訓を抽出しようとする、たいへんややこしい事になつて来るのである。それでは一体、何のつもりでお前はこの物語を書いたのだ、と短気な読者が、もし私に詰寄つて質問したなら、私はそれに対してかうでも答へて置くより他はなからう。

性格の悲喜劇といふものです。人間生活の底には、いつも、この問題が流れてゐます。

間違つても、ここから「瘤取り」の主題が「性格の悲喜劇」にあ

るなどという解釈を引き出してはならない。ここには「桃太郎」、「猿蟹合戦」、「花咲爺」を除外することによって『お伽草紙』の世界全体が成立していることの巧妙でかつラディカルな宣言が込められているのであり、「所謂『不正』の事件」が「一つも無い物語世界を紡ぎ出すことが、敵々極悪、味方々正義という二分法が日本全体を強制的に支配していた太平洋戦争末期の「悪気流」との関係の中においてもっていた意味をわれわれは見落としてはならないだろう。

6

『お伽草紙』には「浦島太郎」を材料にした「浦島さん」が入っている。「浦島太郎」の流布形は一応〈動物報恩譚〉に分類するとは可能であるが、この系列の話としては定型からの逸脱がはなはだしい。日高昭二氏は『お伽草紙』論——心性としてのテクスト⁽¹⁷⁾で島内景二氏の「如意宝」概念を引いているが、島内氏には動物報恩譚を「命を救われた動物が、お礼として、助けた人物の不老不死・地位昇進・財産蓄積を可能とする如意宝を可能とする如意宝を授けるといふもの」であり、「異類婚姻譚」も「人間を幸福にする子供(如意宝)を、恩を受けた動物が人間に授ける報恩譚でもある」とする話型分類と定義があり、その上で、中世『御伽草子』の「浦島太郎」について、「釣った亀を放してやったくらいで無限の幸福をもたらす如意宝が手に入っては、読者としても物足りなからう」という疑問から出発して独自の分析を進めているが、現在の流布形の⁽¹⁹⁾

「浦島太郎」のプロットでは、むしろ浦島が亀を悪童たちから助けてやった〈報恩〉が行われたのかどうかという疑問の方が先にくるのではないだろうか。「玉手箱」が「開けて悔しい」ものとして性格づけられている以上、浦島は亀を助けたにもかかわらず、結局〈恩返し〉としての「如意宝」を得ていないという解釈も成り立つからである。この「浦島太郎」の動物報恩譚としての曖昧さは、もともと伝説としての古形には恩返しの部分が存在していなかったことに加えて、『御伽草子』時代にはまだ亀と乙姫との同一性が明確で異類婚姻譚としての骨格がはっきりしていたのが、その後の伝承過程で亀が乙姫から切り離されて「竜宮城お抱えのハイヤーの運転手の位置まで身を落とさざるをえなくなった⁽²⁰⁾」という変形が行われたためらしいが、この点——「浦島」の流布形が〈報恩〉の内実がはっきりしない話になっているということ——が、『お伽草紙』への「浦島」採用のポイントだったのではないだろうか。動物を助けた報恩として得た「如意宝」の中身が明確な話だと、主人公が宝物を獲得する話、善悪応報譚系の話の全体を除外してきた『お伽草紙』の路線と矛盾することになるからであるが、ここで当然問題になってくるのが「舌切雀」の結末部である。『お伽草紙』の「舌切雀」は、お爺さんが小さい葛籠のお土産さえ拒絶し、一本の稲の穂だけを貰って雀の宿から帰還するという作り替えが行われているところまでは、これまで見てきた除外のストラテジーにふさわしい操作だと言えるが、ところがその後の展開で老婆さんが貰った大きな葛籠の中から蛇や化け物の類が出てくるのではなく、葛籠の中身は「燦然たる金貨」だったという意外な方向への変形が行われているばかり

か、こともあろうにその後お爺さんが「一国の宰相」にまで出世して「雀大臣」と呼ばれるようになったという、おそらく「舌切雀」のどのバージョンにも見られない後日譚付け加えられているからである。

お伽嘶群の中から鬼征伐、仇討ち、主人公が宝物を獲得する話、善悪応報譚を注意深く取り除くことによって『お伽草紙』の世界を編んできた作者が、最終編の「舌切雀」の最後になって、それまでの路線を一挙に覆すようなエンディングをあえて創作したのはなぜなのか？ この問題を考えるためには、結末部の表現の仕掛けに眼を向けなければならないだろう。「舌切雀」の最後の語りは次のようになっている。

「どうやら、葛籠が欲しいやうだね。」

「ええ、さうですとも、私はどうせ、慾張りですからね。そのお土産がほしいのですよ。それではちよつと出掛けて、お土産の葛籠の中でも一ばん重い大きいやつを貰つて来ませう。おほほ。ばからしいが、行つて来ませう。私はあなたのその取り澄したみたいな顔つきが憎らしくて仕様が無いんです。いまにその贗聖者のつらの皮をひんむいてごらんにいます。雪の上に俯伏して居れば雀のお宿に行けるなんて、あはは、馬鹿な事だが、でも、それではひとつお言葉に従つて、ちよつと行つて来りませうか。あとで、嘘だなどと言つても、ききませんよ。」

お婆さんは、乗りかかった舟、お針の道具を片づけて庭へ下り、積雪を踏みわけて竹藪の中へはひる。

それから、どのやうな事になったか、筆者も知らない。

たそがれ時、重い大きい葛籠を背負ひ、雪の上に俯付したまま、お婆さんは冷たくなつてゐた。葛籠が重くて起き上れず、そのまま凍死したものと見える。さうして、葛籠の中には、燦然たる金貨が一ばいつまつてゐたといふ。

この金貨のおかげかどうか。お爺さんは、のち問もなく仕官して、やがて一国の宰相の地位にまで昇つたといふ。世人はこれを、雀大臣と呼んで、この出世も、かれの往年の雀の愛情に対する愛情の結実であるといふ工合ひに取沙汰したが、しかし、お爺さんは、そのやうなお世辞を聞く度毎に、幽かに苦笑して、「いや、女房のおかげです。あれには、苦勞をかけました。」と言つたさうだ。

この表現のキーポイントは、明らかに、傍点を付した「それから、どのやうな事になったか、筆者も知らない」という一行にある。絵本を材料にしてそれを「铸造」し直すことによって物語を書いていることを明言しつづけてきた語り手が、最終編「舌切雀」の末尾近くになって突然、ストーリーテラーとしての役割の放棄を宣言してしまうというのはまことに異様な設定であるが、ここに周回な仕掛けを読み取ることができると私は考えている。「舌切雀」の「筆者」が責任を持つのはお婆さんが竹藪に入ったところまでであつて、その後、お婆さんが雀の宿にたどり着いたかどうか、大きな葛籠を貰ったかどうか「知らない」というのであるから、「筆者」が責任を持つ範囲内の物語は善悪応報譚としての結末を完全に欠落させていることになる。しかも「筆者」はわざわざ自分の「知らない」伝聞情報の中から、雀の舌を抜いたお婆さんの「葛籠

の中には燦然たる金貨が一ぱいつまつてゐたといふ」という風聞(?)を選び記すことによつて、自分のストーリーライターとしての志向性が善悪応報譚とは反対の方向に向かつているというメッセージを発信しているのである。

またその後に、原話にはまったくない「雀大臣」伝話についての叙述が付け加えられていることの意味も、それを「筆者」が「知らない」という設定になっていることと切り離すわけにはいかないだろう。この設定は、おそらく三重の意味において「雀大臣」伝説にかかわっているはずである。第一は言うまでもなく、この部分を「筆者」の責任の圏外に弾き出すことによつて、「筆者」の物語がこうした長者伝説とは異質のものだという落差の強調であるが、第二に、それとは逆に、この不確かな風聞と「筆者」が責任を持つ物語との間の連続性の可能性をも同時に示しているという点を見ておく必要がある。お婆さんが「積雪を踏みわけて竹藪の中へはひる」までの物語内容において、「筆者」はお爺さんは、早くから「世捨人」として生活を続けており、雀の宿を去る際にも「荷物はごめん」と言い張って一切の葛籠を受け取らないというところまでその無欲さを徹底させているため、そのお爺さんの人物像と、「仕官」して「一国の宰相」に出世していくという「雀大臣」のお爺さんの像とはまったく結びつかないかのように見えるのだが、ところが「筆者」の物語において、雀に向かつて「おれは何もしてゐないやうに見えるだらうが、まんざら、さうでもない。おれでなくちや出来ない事もある。おれの生きてゐる間、おれの真価を發揮できる時機が来るかどうかわからぬが、しかし、その時が来たら、おれだつ

て大いに働く」と語るお爺さんの姿が挿入されていたことを見落としてはならない。「筆者」の責任範囲内の物語の言説ではもっぱらお爺さんの無欲の方が前景化されているために読者はこちらの面を忘れてしまいがちであるが、末尾に付加された「雀大臣」伝説の叙述は、読者にあらためてお爺さんのこの台詞を想起させる効力を持っている。つまり「おれの真価を發揮できる時機」を待ちつつ雌伏の時間を過ごしている野心的なお爺さんの姿の方に焦点を合わせれば、「時機」を得て「仕官」していくという将来像をも一概には否定できない仕掛けになっているのであり、その結果、竹藪に入ったお婆さんの動機が葛籠ほしさではなく「乗り掛かかつた舟」と説明されていることという設定とあいまって、お爺さん無欲、お婆さん欲張りという善悪二分の構図が完全に否定されることになる。したがって唐突に出てくる「雀大臣」伝説は、それまでの『お伽草紙』の世界原理を覆えすものではなく、むしろ巧妙なたちでそれを貫徹させているのだと考えることができる。そして第三の仕掛けは、物語内容に筆者が責任を持たない物語行為が、「因果律的な物語」作り自体を無化していく試みになっているという点である。お爺さんの「出世」の原因を「往年の雀に対する愛情の結実」と見なす「世人」好みの「物語」を、お爺さんの「いや、女房のおかげです」という言葉が無化し、そのお爺さんの語る「物語」の言説も「幽かに苦笑して」という修飾語によつて明確に相対化され、そして「雀大臣」伝説の全体を「知らない」と突き放すことによつて、「筆者」が「因」の真相についても「果」の信憑性についてもみずから「物語」を一切提示しないという入り組んだ語りの構造は、因果関

係の定立の上に成立する「物語」の恣意性に対する痛烈な反措定になつてゐる。善悪報恩譚系の話を注意深く除外することによって物語世界を創り上げてきた『お伽草紙』の作者は、最後に「因果律的な物語」そのものの否定姿勢を覗かせて作品を閉じているのである。このことは本稿で見て来た除外のストラテジーが、戦争、とりわけ天皇制下での戦争が一本の因果律に国民全員を強制動員して行く巨大な「物語」に支えられていた中であつて、この「物語」の暴力に、因果律を排した物語の創造によって立ち向かおうとする文学的な闘いとしての側面を持つていたことを示していると同時に、一九四五年八月を境にしてそれまでの「物語」の暴力性に対する反省を欠いたまま、もう一つの「物語」にやすやすと移行していきこうとする者たちに対するシニカルな批評としての新しい意味を生成しながら、アメリカによる「占領」空間に向かつていち早く投ぜられた一石でもあつたと言ふことができるのではないだろうか。ちなみに敗戦直後に筑摩書房から出た出版物のうち、全ジャンルを通じての第一弾が小説『お伽草紙』であつたといふことである。⁽²¹⁾

(1) 藤村道生氏が「二つの占領と昭和史——軍部独裁体制とアメリカによる占領——」(『世界』一九八一・八)で、一九三七年の大本営設置からサンフランシスコ条約までの時期を、日本民衆が「軍部」と「アメリカ」による全面占領を受けていた時期ととらえる昭和史観を提起し、これを受けて磯田光一氏が、『大岡昇平集1』(岩波書店、一九八三年)「解説」の中で「この観点に立つかぎり、一九四〇年代とは、軍国政権による日本占領」と、アメリカによる日本占領」とが入れ替つて連続した時代と規定できる」と述べている。

(2) 『お伽草紙』論覚え書。『一冊の講座 太宰治』(有精堂、一九八三)。

(3) 『お伽草紙』の桃源郷(『日本近代文学』第二十一集、一九七四・一〇)。

(4) 明治十八(一八八五)年から二十五年にかけて外国人のための日本土産用に刊行されたちりめん本の英訳『Japanese Fairy Tale Series』(全二十編)の第一編が「Momotaro or Little Peaching」であり、有名な巖谷小波による『日本昔噺』(全二十四編)も「第巻編桃太郎」(明27)で始まつているし、森鷗外らによつて編まれた『標準於伽文庫』(大正9・10)もやはり「桃太郎」をトップに据えた「日本童話」から配本が開始されている。また教科書教材としては「一八八七年、文部省編の『尋常小学校読本』以降、検定本・国定本を通して日本の敗戦まで、小学校用国語教科書には必ずこの民話が登場していた」(鳥越信氏)という。

(5) (7) 『桃太郎像の変容』(東京書籍、一九八一)

(6) 『桃太郎の運命』(NHKブックス、一九八三)

(8) 馬場あき子氏『鬼の研究』(三書房、一九七二)。なお馬場氏はこの書の中でも太宰の『お伽草紙』に若干言及しているが、その後『お伽草紙』を単独に論じた論文「太宰治と日本の古典——なぜお伽草紙か」(『国文学』一九七四・二)において、太宰が「瘤取り」の鬼の性格決定から「佞悪」の要素を取りのぞいた」ことに注目しつつも、「桃太郎」除外の問題については「とにかく桃太郎の登場の場面を用意できなかったことは、戦争と切りはなして考えたとしても、なおきわめて太宰的であるように思われる」という方向での評価線を鮮明にしている。

(9) 『宇治拾遺物語』でも、鬼たちの姿は「赤き色には青き物を着、黒き色には赤き物をたふさきにかき」(『新潮日本古典集成』版より引用、注16も同じ)という多色的な描写になつてゐる。

- (10) 『太宰治』(津軽書房、一九七九) および『評伝 太宰治』第三部(筑摩書房、一九八五)。
- (11) 論文「かちかち山」の初出は『文鳥』一九三五年四月。なお本稿中の柳田國男の引用はすべて筑摩書房版『定本 柳田國男集』に拠った。
- (12) その後の昔話研究の中で「かちかち山」が複合昔話であるかどうかをめぐる議論があり、また複合昔話論者も二話複合派と三話複合派に別れているようだが、兎と狸の部分が独立した話の源流を持つという見解の優位性は動かないようである。鳥居訓子氏「かちかち山」の「話型研究」△土曜会昔話論集―昔話の成立と展開―一九九一・一〇〇がこの問題の諸説整理と考察を行っている。
- (13) 柳田がビルマのシャン族に伝わる昔話を採集した Leslie Milne の『Shans at home』の中に、兎が虎を何度も騙していたぶったあげくに泥沼に誘い込んで殺すという「かちかち山の後半と同じ話」があり、「この一話は少しづつの変形を以て印度支那の各地まで行き渡つて居る」ことを紹介して、兎が狸を騙して殺害する部分が大陸伝来のものである可能性を示唆した「続かちかち山」を含む『昔話覚書』が出たのは、『お伽草紙』執筆のほぼ二年前であるが、『お伽草紙』の着想時期が一九四四年十二月以前に溯るという上林暁らの証言に従えば、太宰は、柳田のこの本が出た翌年御伽噺の小説化構想を抱いていたことになる。また馬場あき子氏は『お伽草紙』の「瘤取り」の舞台が「四国の剣山」に特定されている点について、柳田からの影響関係を示唆している。
- (14) 前掲『桃太郎の誕生』。
- (15) 滑川道夫氏前掲書。
- (16) 「瘤取り」——太宰治(『国文学』一九六七・三〇五)。ただし『宇治拾遺』では鬼が「瘤は福の物なれば、それをぞ惜しみ思ふらん」と言ったのに対して「翁」は「たと目鼻をば召すとも、この瘤は許し給ひ候は

ん。年ごろ持ちて候ふ物を、故なく召されん、術なき事に候ひなん」と答えているが、これが嬉しさを押し隠した演技なのかどうかについての明示表現はなく、物語の語り出しも「これも今は昔、右の顔に大きな瘤ある翁ありけり」という出来事の提示だけで、「瘤」に対する「翁」の感情は語られていない。

- (17) 『国文学』一九九一・四。
- (18) 「語型事典・素材事典の試み」、『源氏物語の話型学』(べりかん社、一九八九)所収。
- (19) 『御伽草子の精神史』(べりかん社、一九八八)。
- (20) 浅見徹氏『玉手箱と打出の小槌』(中公新書、一九八三)。
- (21) 野原一夫『生くることも心せき 小説・太宰治』(新潮社、一九九四)。

〈付記〉『お伽草紙』の引用は、基本的に、筑摩最新版『太宰治全集』第七卷(一九九〇・六)に拠った。